

第4分科会 自立活動

テーマ 「一人一人の教育的ニーズに応じた豊かな生活を支援する自立活動」

提案2 「主体的に授業に参加するための手立て」

発表者 愛媛県 東温市立重信中学校 教諭 渡部 和江
司会者 愛媛大学教育学部附属特別支援学校 教諭 石川 圭
助言者 高知県教育委員会 特別支援教育課 チーフ 板橋 潤子

I 実践に当たって

新学習指導要領では、特別支援学級においても自立活動の指導を取り入れることが示された。障がいのある児童生徒は、その障がいによって、各教科等において育まれる資質・能力を身に付ける上でつまづきを生じやすいため、自立活動における個別の指導計画を作成して、それに基づいて指導することとされている。そこで、愛媛県総合教育センター特別支援教育室により作成された「特別支援学級における自立活動ガイドブック」を基に、自立活動の指導計画を立て、実践を行った。

II 実践内容

1 対象生徒Aさんについて

Aさんは自閉症・情緒障がい学級在籍の2年生女子である。生活力があり、基礎的な学習についても理解している。しかし、気持ちの変化が大きく、集団の中で活動することに対する不安感が強く、友達と一緒に授業に参加できないときがある。

2 自立活動の指導計画の作成

(1) 中心的な課題

様々な活動の中で自己肯定感を高めるとともに、自分の不安な気持ちを他者に伝えられるようにすることで、安心して集団の中で自分の力を発揮できるようにする。

(2) 長期目標

- ・友達と一緒に活動に取り組むことができる。
- ・教師に不安な気持ちを言葉で伝え、相談できる。

(3) 1学期の目標

学級担任の言葉掛けにより、不安なことを言葉で伝えることができる。

(4) 目標設定に当たって

自立活動の内容の6区分で実態を整理し関連性を考えることで、Aさんの集団参加の難しさの原因は活動や人への強い不安感によるものであることが推察された。目標を設定する際は、Aさん自身が具体的に何をするのかイメージできるようにした。

自立活動の指導「手順シート」					作成日 2年3月1日	
学年	中2	氏名	A	(自閉症・情緒特別支援学級)		
① 実態把握	誰がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよき、困難、本人・教員等の思い ・家庭でよく手伝いをしており、手伝いのことが自分できちんとできる。 ・自分の得意なことが少ない面がある。 ・他人の視線が気になる。集団の中で活動することに苦手意識がある。 ・気になることがあると気持ちが大変になることがある。男子生徒と一緒にいることに苦手意識がある。 ・できばえと行動できるが、意欲的に行動してしまっていることがある。 ・数学の基礎計算は理解できず、自信が低い。 ・気持ちを言葉で伝えるのが苦手である。 ・手先が器用で、読解、数値、ペーパーワークなどが自分の力である。 ・読書が好き、毎日読書の時間がある。 ・授業中に自分から発言することが増えてきている。					
② 実態把握の整理	健康の維持 ・発達障害や障がいの状態を維持している。さらなる障がいへの配慮が必要である。	心理的な安定 ・集団の中にいることに不安を感じる。 ・他人の視線が気になる。	人間関係の形成 ・他者の言葉や態度を敏感に察知し、それに応じて行動することが難しい。	環境の把握 ・授業中に必要な道具や材料が揃っている。 ・授業中に必要な道具や材料が揃っている。	身体動き ・授業が理解できず、授業中に必要な道具や材料が揃っている。 ・授業が理解できず、授業中に必要な道具や材料が揃っている。	コミュニケーション ・自分の気持ちを言葉で伝えるのが難しく、不安な気持ちを言葉で伝えるのが難しい。 ・不安な気持ちを言葉で伝えるのが難しい。
③ 課題の抽出	・集団に入ることに対する不安感が強い。 ・見通しが持てなかったり、他人の言葉を肯定的にとらえたりして不安になる。 ・不安なことを言葉で伝えるなどして、解決する方法を身に付ける。					
④ 中心的な課題	・スモールステップで活動に取り組むことで、自己肯定感を高める。得意な活動を通して友達との適切な関わり方を身に付ける。不安なことを言葉で伝えるなどして、自分で解決する方法を身に付ける。					

〈自立活動の手順シート〉

(5) 指導内容

① 一日の始まりに、不安な気持ちを数値化することで自分の気持ちを明確にして、何が不安か学級担任に伝えることができるようにする。

② 学級担任は、Aさんの不安な気持ちを十分に聞いたり、解決方法を一緒に考えたりすることで、Aさんの不安が軽減できるようにする。

具体的な指導方法としては、Aさんは自分の気持ちを伝えるのが苦手なため「伝える」きっかけとなるものが必要であると考えた。そこで、家庭配付用週間時間割を利用した「マイ気持ちメーター」(図1)を使い、学習時間ごとの自分の気持ちを「1(心配)~5(がんばれる)」と数値化して、記入するようにした。

- ・学級担任が、毎朝、Aさんの机の上に「マイ気持ちメーター」を置いておく。
- ・登校後、Aさんは「マイ気持ちメーター」を見て、一日の学校生活に見通しをもつとともに、学習時間ごとの自分の気持ちを数値化して、記入する。
- ・Aさんが記入後、学級担任に持ってきた際には、指導内容②に示した対応を心掛け、不安が軽減できる経験を重ねられるようにした。

③ 頑張りを視覚化するため、学級全員に一つずつボトルを持たせ、ビー玉貯金(図2)を行った。帰りの会で各自が頑張って参加できた授業の数を自己申告させ、その数のビー玉を入れるようにした。全員の「ビー玉貯金」がいっぱいになれば学級で楽しい活動をするようにした。

4	授業 11・13組	数学			英語
5	事前決 断の行 き方	学	国語		報告会 表彰伝達
6	修学旅行 ガイダンス	作	授業 11・13組	5	-
放 課 時 間 下 校	-	-	-	-	情報処理部
	16:00	16:00	12:00	12:00	16:00

5	4	3	2	1
が				心
ん				配
ば				
れ				
る				

〈図1 マイ気持ちメーター〉



〈図2 ビー玉貯金〉

3 | 学期のAさんの変容

始めは、学級担任から促されて自分の気持ちを数値化し、理由を尋ねると答えていた。2週間ほどすると、自分で「マイ気持ちメーター」に数字を書いて見せに来た。その日以降、Aさんが自発的に持ってくるのを待つようにすると、Aさんは毎日、「マイ気持ちメーター」を忘れず記入して持ってきて、何が不安かを具体的に学級担任に話すことが増えてきた。ある日、「-10」と書いてくることもあり、理由を尋ねると「これは絶対無理」と話すこともあった。そのようなときでも、常に共感的な態度と発言を心掛けた。数値が「1」であっても、参加できることが増えてきた。

4 2学期に向けて

1学期末のAさんの姿から、学級担任だけではなく、教科担任にも相談できるよう、2学期の短期目標及び指導内容を次のように設定した。

(1) 短期目標

教科担任に不安なことを伝えることができる。

(2) 指導内容について

- 「マイ気持ちメーター」を使って、教科担任に不安な気持ちを伝え、相談できる。
- 教科担任は、Aさんの不安な気持ちを十分に聞いたり、解決方法を一緒に考えたりすることで、Aさんの不安が軽減できるようにする。
- 引き続き、「ビー玉貯金」を続ける。ビー玉の数ではなく、適切に自己評価できていることを称賛する。

5 2学期のAさんの変容

毎朝、「マイ気持ちメーター」を使って、自発的に学級担任に不安な気持ちを伝えることはできたが、教科担任に伝えることに対して抵抗感があった。そこで、どのように伝えたらよいか事前に相談しておき、実際に学級担任が付き添って行った。参加できないときは、見学したり、できる活動にだけ参加したりするなど、どうしたらよいか相談して、行動できるようになってきた。徐々に、自ら進んで教科担任に伝えることが増えるとともに、ほとんどの教科に積極的に参加できるようになった。本人が得意な活動（体育や調理）では、苦手意識のあった友達と一緒に活動する姿も見られるようになってきた。

そして、2学期末にはビー玉貯金がいっぱいになり、みんなで相談して好きなレクリエーションや調理を行った。友達と一緒にビー玉を貯めることは、大きな励みとなり、主体的な取組を後押ししたと考えられる。

また、Aさんに、気持ちを数値化したことについて尋ねると、「自分はこんな気持ちだったんだなと思った」と答えた。漠然とした不安感をもっていることに気が付いた様子であった。自分自身について客観的に理解することにつながったと思われる。

III 成果と今後の課題

今回の実践においては、センター所員の助言を受けながら、自立活動の指導「手順シート」に記入することで、実態把握、実態把握の整理、課題の抽出、中心的な課題、指導目標の設定、指導内容の選定と設定、評価の一連の流れを理解することができた。その中で、実態把握と中心的な課題を設定するところが特に重要であると感じた。また、分かりやすく具体的な目標を立てること、生徒自身が理解し主体的に取り組めるよう設定していくこと、複数の指導者で計画していくことも必要である。

対象生徒の課題であった、不安感に対する支援を行ったことで、各教科等への主体的な取組が見られるようになってきた。自立活動の指導が各教科等の指導の支えになることを改めて実感した。また、個々の生徒の支援とともに、学級集団全体へ

の支援を行うことも大切であり、より良い環境づくりも必要であると感じた。今後も、生徒自身のつまずきや課題は何かを見極め、スモールステップで取り組めるよう目標設定や指導計画を立て、実践していきたい。

〈指導・助言〉

「主体的に授業に参加するための手立て」をテーマに、愛媛県総合教育センター作成の「特別支援学級における自立活動ガイドブック」を基に、実践された事例である。

本教諭の実践の素晴らしいところは、いくつもあるが、1点目は、生徒の実態把握に、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編で紹介されている「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図」を参考とした「自立活動指導『手順シート』」を活用し、生徒の実態把握を整理、具体的な指導目標を設定し、スモールステップで指導が実践されていることである。本教諭のように生徒の実態把握を行う際に、自立活動の6区分で整理すると、様々な要素が関連していることが浮かび上がってくる。項目を関連付けながら、何を中心課題に設定したらよいかを考えることは難しい面があるが、今までの学習で身に付いてきていることを基に、卒業後の姿を想定し、今一番課題として身に付ける力は何かという視点で整理し、中心課題を設定していくことが大切である。この作業を行う際に、一人で考えるだけでなく、複数の教員で考えたり、専門家からの助言をいただいたりするなど、多面的な視点で考えると、よいアイデアが浮かぶことが多い。また、本教諭の実践がうまくいった背景には、目標設定に、生徒も一緒に考えているということがある。

自立活動は、いうまでもなく、「個々の幼児児童生徒が自立を目指し、障害上による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養う指導」である。そこで、生徒が、主体的に学習することができるように、指導を組み立てることが重要である。そのためにも、目標を教員と生徒と一緒に考えることは非常に有効な方法であることが本レポートからうかがえた。

また、生徒の障がいの特性に応じた支援、「マイ気持ちメーター」による数値化、そして、不安を前もって改善できるように話し合うこと、さらに、できたときには、「ビー玉貯金」を用いて視覚的に自分自身で評価できるように仕掛けられている点、これらが、生徒の指導に有効であった。

今後、自立活動の時間の指導についても、実践研究を進められるようであるが、今回の実践同様、実態把握から中心課題を整理し、指導場面、指導方法、指導形態等を検討することと併せて、具体的な行動目標を設定することで、生徒が自分自身で「できる」を実感できるような評価の工夫がなされることを期待する。